新渡戸稲造の国際理解

諏訪内敬司

目次

はじめに
一、愛国心（patriotism）
二、東西の区別と融合
三、国際心（international mind）
四、国際心を高め、国際理解を深める方策

はじめに

生涯の三分の一を外国で生活し（『新渡戸稲造全集』①「東西相触れて」序）、青年時代より死ぬまで綴った『日記』（未公開）もすべて英語で書くなど、日本語よりも英語の方が不自由なく使えて、日米交換教授、国際連盟事務局次長、太平洋問題調査会理事長等として国際舞台で活躍した新渡戸稲造（文永二年〈一八六二〉―昭和八年〈一九三三〉）は、日本の先駆的な「国際人」の一人と言われている。その新渡戸は「国際理解」をどうとらえていたのか。国際相互理解を考える場合、自国の尊重と他国の尊重とをどう調和融合させるかは重要な課題であろう。そこで「国際人」新渡戸稲造が愛国心と国際心との調和という問題をどう考えていたのか、という観点か

ら考察してみたい。

一、愛国心[1] (patriotism)

新渡戸稲造は愛国心を明確に定義はしていないが、それは自分の住む国土への愛情や愛着だけでなく、「かつての自分たちの居住地 (habitat) につながる伝統を含むもの[2]」で、広く伝統や文化全体に対する愛情愛着ととらえている。そしてそれを、「民族的自負心 (race pride)」と同列に扱っている[3]。

(一) 愛国心を生む要因

人間に愛国の心が働くのは、感情の自然な働きによるという。それは第一に、自分の住む土地への愛情愛着が自ずと愛国心を抱かせるとする。「自分が生まれ育った土地への愛情 (the local love of the land) は自然なもの[4]」で、どの国民もそれをもつだけでなく[5]、動物さえも抱く感情であるという。さらに、人間が集団生活を営むことが仲間を大切に思う心を育むとする。曰く、「最低の形態である群居本能 (herd instinct) が愛国心を最高の美徳の一つに押し上げた[6]」と。第三に、国民的特性が第三者との関係において一層強調されることによる。「国民的特性 (national traits) は、普通、強調され燃えるようにあざやかに着色されて世界のスクリーンに投映される[7]」。そこで、培養された特性が国を愛する心を強く意識させることになるのである。

(二) 愛国心の二段階

この自然な感情の発露としての愛国心は二段階に分かれるというのが、新渡戸の説く愛国心の特色である。第一段階は「低俗 (low)、通俗 (vulgar)、平凡な (exoteric) もの[8]」、第二段階は「高等 (higher)、真実 (truer)、深遠な (esoteric) もの[9]」である。新渡戸は前者を外向的愛国心 (extrovert patriotism)、後者を内向的 (introvert) 愛国心とも呼ぶ[10]。

①外向的 (extrovert) 愛国心

外向的愛国心は、人に父性的な愛 (paternal love)、男性的な態度 (masculine attitude) を取らせるものである[11]という見方を新渡戸は取る。つまり、外に向かって積極的に自国の素晴しさを誇る「外向的愛国心」というものである。例えば、外国在住時に、母国の名に恥をかかせまいとする配慮が働いて、行動の規範となる個人的・国民的名誉心[12]をその典型例とする。

【熱狂的愛国心】

しかし、この種の愛国心をもつ者は西洋文明の優れた面と劣った面との区別を客観的に立てることができない[13]。つまり外国文明を客観的に評価できず、そのことはかえって自らが不完全であることを際立たせることになってしまう、というのである。この愛国者は国の中身ではなく、国土そのものを愛する熱狂的愛国主義者[14](chauvinist)になりやすく[15]、新渡戸はそれを病的愛国精神 (morbidly patriotic mind)[16]、あるいは「一種の偏見[17]」の持主とさえいう。このように新渡戸は、外向的愛国心は一線を越えて熱狂的愛国心に陥りやすいと見ているのである。

「その真の趣旨は健全な (whole) もの[18]」と、新渡戸は熱狂的愛国心を本来肯定的にとらえている。そして、一面では自国が外国からの影響に左右されすぎる点を反省し、伝来の考え方生き方 (ancestral modes of thought and life) に戻り、国内の衰微した諸制度 (effete institutions at home) を擁護するというプラス面があると[19]

応評価する。また、その生み出す感情や態度は嫌いだが、ある点で民族の活力(race vitality)、国民精気(national energy)の指標[20]にもなるという。新渡戸はこれを積極的態度と呼ぶ。

【マイナス面】

この種の愛国心には、プラス要因以上にマイナス要因が強く働くと指摘する。例えば、「われわれは……自分たちが他の人々より勝れているのだと常にうれしく思っている[21]」と。それは人間の「優越感」にひたりたいという傾向性からくることである。人間は外国人との関係において、外国人は自分たちより劣ると述べたい誘惑に駆られ、逆に自分は外国人より優れていると考えるのは愉快なことだからそうしてきた[22]という。

人間はとかく自国以外に同情を及ばせることが少なく、自国を愛する他国人に対してさえ好意を抱くことは稀であると[23]、当時の日本の愛国者の偏狭性を批判する。こうした態度は結局、自国の利益ばかり考え、先方のことは考えない[24]という心の利己的な働きから起こることであり、これは国際理解には障壁となる。

こうした態度が、外国の影響(foreign influences)を元に返そうとしたり、西洋を忌み嫌い、外国の仮想敵を攻めようとすることになる[25]。これが高じると国際紛争へと発展する恐れがある。そこまでは行かなくても、むやみに外国語の研究(the study of foreign tongues)を非難したり、和漢古典の復興を望む[26]という行動に出させるのである。新渡戸はこれを消極的態度と呼ぶ。

新渡戸によれば、このような愛国の態度は結局、国民一人一人を国家に頼らせてしまい、個人としての人格が確立されていない[27]ことから起きるのだという。つまり、個人の責任、人格を尊ばず、個人という観念が弱いことに由来するというのである。これは個人の人格尊重の観念が弱い日本人を意識しての発言であろう。

【危険性】

このようなマイナス要因をもつ第一段階の愛国心は、危険であると新渡戸はいう。「われわれはわれわれが到達した高さ(heights)によって自己を評価する。そして他の人々を彼らが落ち込んだ深さ(depths)の程度によって評価する[28]」と。この種の愛国心が自分を長所によって自己評価し、他人はその短所によって評価するという自己中心的な狭い考え方に由来することを問題にする。自らを誇ることは同時に、他をけなすことになりやすいという危険性が伴うのである。しかも、国民の自尊心(self-respect)を支えるのはこの自己評価[29]であり、他国民の自尊心を尊重する限りこれは推賞されるべきだが、他国民を犠牲にして育まれると、国民にとって落とし穴となり、また他国民にとっては脅威(menace)[30]となる。さらに、偽善の危険、職業的な愛国心(professional patriotism)の頑固さ、理性(reason)を越えた熱中ぶりにさらされる[31]とまでいう。

「民族＝人種意識(race consciousness)はこれまでほとんど常に誤った方向をたどって人種偏見(race prejudice)と敵意(animosity)へと導かれ、その結果美しく映し出された純化された国民的特質(national traits)は、相互理解の障壁(barrier)と化してしまった[32]」。つまり、民族や人種意識を強調しすぎると優越感につながりやすく、その結果、相互理解の壁となるのである。すなわち、民族的誇り(pride of race)をもつことはいいが、一定の線を越えて優越感(sense of superiority)のレベルに達すると警戒を要する[33]のである。誇りの後に破壊が、高慢な精神の後に破滅が訪れやすいからであるという。ただ、その線は何か、またどこで計るのかについて、新渡戸は明確にしていない。

「日本人は日頃でもこの[引用者注：マイ・カンツリー・ライト・オア・ロングという]感情が強[34]く、外向的な人は外国との紛争や国家的変革という状況ではこの種の愛国心を呼びさまされ、侵略的(aggressive)になりやすく[35]、あるいは、自国擁護の心が働いて、「国に大事のある場合には、愛国心はすぐ盲目になりやす」く、「こ

れが非常な過ちを招くこともある」[36]のだという。

愛国心は錦の御旗になっており[37]、これが最後の拠り所となって、不道徳な行為をしても、あるいは人道に反しても許されることになりかねないと、新渡戸は愛国至上主義に反対するのである。この種の愛国心は、国内では寡黙の欠如、言語過剰の国粋主義者、国外では封建時代の社交性(sociability)を低く評価した教育の影響による社交性の欠如と、外国語の文法を間違えて国の体面を汚してはならないと恐れる無口、寡黙遠慮[38]な愛国主義者の輩出となる。

【昭和初期の日本の状況対して】

大和民族、日本古代文化の研究がとかくその優越性に集中しやすかったことに対して、学術上の客観性、冷静さを求め[39]、いかにその純粋性を誇ろうとしても、中国や朝鮮半島からの帰化や文化的影響が既にある時期から及んでおり、事実に基づかない説をあたかも学説であるかのごとくに吹聴するという風潮があることを戒めている。たとえその説を政略的に用いても長くは続かず[40](天孫民族説の例)、効果は少なく、かえって弊害[41]でさえあるとする。すなわち、日本の歴史や文化の優秀性、純粋性、歴史の長さを史実に基づかないで誇ることの無意味さや誤りを指摘する。単に誇るために延長する「歴史のねつ造」は恥ずべきこと、多少延長したところで中国やエジプトにはかなわないと[42]。むしろ、古いことよりも、正直であることを誇るべきであるという警鐘は、昭和初期の日本のあり方に対し客観的な立場から問題視していたからこそ可能であったと言えよう。

以上のように、新渡戸はこの種の愛国心には基本的に理解を示しつつも、国際理解にとっては障壁になりやすいと強く警戒している。国際理解に有効な愛国心は、それから枠を一歩越えたものにならなければならないとする。それが第二段階の愛国心である。

②内向的(introvert)愛国心

新渡戸の考える真の愛国心は内向的愛国心と呼ばれるもので、それは視野の狭い、口先だけの愛国と違い、自国政府の方針や行動をすべて認めることではなく、「己の良心に照らして過れる国是と思うものは之に反対し、之を攻撃し其改正を促す[43]」ことこそ、真の愛国であるとする。それを国際心につながると評価し[44]、この愛国心こそが人類の平和と福祉(peace and welfare of the human race)に貢献すると考える[45]。

この第二段階の愛国心と熱狂的愛国心(chauvinism)[46]との関係は対義でさえあるというのが、彼の考え方である。

【特徴】

内向的愛国心の特徴は、自国に対しても他国に対しても客観的になり、正義に基づき自らの欠点をも認識[47]するだけではなく、自国のために理想(ideal)をもっており、自国の不完全を嘆き悲しむ(bewail)[48]のである。

【憂国心】

この第二の愛国心を新渡戸は、憂国心(matriotism)とも呼ぶ。憂国心は父として敬う第一の愛国心と比較して、母性的な(maternal)、母として気づかう心であり、自国の悲しみ、罪、社会制度の不完全さ、法の不公正さを心配し、将来の事を心配しながら子供[筆者注:国民]に語りかけ[49]、平凡な日常の仕事をこなし、幸福な生活を平穏に求め、「友情を育てる優しい議論に必要な柔軟さと柔順さを備えている[50]」ものである。憂い(sorrow)は愛からくるのでその感情は愛と同じだが、全く同一ではないとする[51]。愛国は罪や欠点さえも愛するが、憂国者は罪欠点のゆえに憂える[52]ものだという。熱狂的愛国者にはなれないが、それでも愛国者であろうとし、当時の日本の行く末に思いを馳せる新渡戸の心情と憂いが、ここに如実に表れていると考えられる。

【時代認識】

時代認識として、もはや自国内での正義（right）、真理（truth）では通らない時代[53]にはいっているとする。今日の国際化時代、グローバル時代といわれる半世紀以上も前から既に鋭い国際感覚で時代をとらえていた、と言えよう。[54]

〈注〉

(1) 『新渡戸稲造全集』（全二十三巻）教文館（第一期一九六九-七〇年、第二期一九八三-七年）では、patriotism は「愛国心」と「愛国精神」と二通りに訳されているが、ここでは「愛国心」とした。

(2) 『新渡戸稲造全集』⑮"Lectures on Japan"p.289,同⑲松下榮人訳『日本文化の講義』、三四七頁。以下"Lectures",『講義』と略す。

(3) 同⑭"Japanese Traits and Foreign Influences"p.587, ⑱加藤茂倫訳『日本人の特質と外国の影響』五七〇頁、以下"Japanese",『日本人』と略す。

(4) 同⑮"Lectures"p.289, ⑲『講義』三四七頁。

(5) 同⑮"Lectures"p.289, ⑲『講義』三四七頁。

(6) 同⑭"Japanese"p.587, ⑱『日本人』五七〇頁、一部改訳。

(7) 同⑭"Japanese"p.587, ⑱『日本人』五七一頁。

(8) 同⑯"Editorial Jottings""The Patriotic Issue in the Dreyfus case'p.328, ⑳佐藤全弘訳『編集余録』「ドレフェス事件における愛国論争」四三四頁、以下"Jottings",『余録』と略す。

(9) 同⑯"Jottings"p.328, ⑳『余録』四三四頁。

(10) 同⑮"Lectures"p.283, ⑲『講義』三四八頁。

(11) 同⑮"Lectures"p.285, ⑲『講義』三五〇頁。

(12) 同⑬"The Intercourse between U.S. and Japan"p.519, ⑰松下榮人訳『日米関係史』五五二頁、以下"Intercourse",『関係史』と略す。

(13) 同㉒"Thoughts and Essays""Our Recent Chauvinism'p.394, ㉑佐藤全弘訳『随想録補遺』「わが国最近の熱狂的愛国主義者」二七九頁、以下"Thoughts"『補遺』と略す。

(14) chauvinist は『全集』では「熱狂的」「狂信的」「好戦的」「従属的」愛国主義者などと訳されているが、ここでは「熱狂的」愛国主義者とした。

(15) 『全集』⑮"Lectures"p.283, ⑲『講義』三四八頁。

(16) 同㉓"Articles to the Osaka Mainichi""Jingoisitic' Reticence p.258, ㉒佐藤全弘訳『英文大阪毎日新福文』「『国粋的』無口」六六頁、以下"Osaka Mainichi",『大阪毎日』と略す。

(17) 同㉒"Thoughts"p.393, ㉑『補遺』二八〇頁。

(18) 同㉒"Thoughts"p.394, ㉑『補遺』二八二頁。

(19) 同㉒"Thoughts"p.389, ㉑『補遺』二七六頁。

(20) 同㉒"Thoughts"p.394, ㉑『補遺』二八一頁。

(21) 同⑭"Japanese"p.587, ⑱『日本人』五七一頁。

(22) 同⑮"Lectures"p.26, ⑲『講義』三三-四頁。

(23) 同①『東西相触れて』二四三頁、以下『東西』と略す。

(24) 同⑥『西洋の事情と思想』五二二頁、以下『西洋』と略す。

(25) 同㉒"Thoughts"p.389, ㉑『補遺』二七六頁。

(26) 同㉒"Thoughts"p.389, ㉑『補遺』二七六頁。

(27) 同⑩『人生雑感』九七頁、以下『雑感』と略す。

(28) 同⑭"Japanese"p.587, ⑱『日本人』五七一頁。

(29) 同⑭"Japanese"p.587, ⑱『日本人』五七一頁。

(30) 同⑭"Japanese"pp.587-8, ⑱『日本人』五七二頁。

(31) 同⑮"Lectures"p.283, ⑲『講義』三四八頁。

(32) 同⑭"Japanese"p.588, ⑱『日本人』五七一頁。

(33) 同⑮"Lectures"p.19, ⑲『講義』二二五頁。

(34) 同⑥『西洋』六〇五頁。

(35) 同⑮"Lectures"p.285, ⑲『講義』三五〇頁。

(36) 同⑥『西洋』六〇五頁。

(37) 同⑩『雑感』九五-六頁。

(38) 同㉓"Osaka Mainich"p.257, ㉒『大阪毎日』六六-七頁。

(39) 同①『東西』二三〇頁。

(40) 同①『東西』二三一頁。

(41) 同①『東西』二二九頁。

(42) 同①『東西』二二六-七頁。

(43) 同④「米国移民法案修正の報を聞きて」五六七頁。

(44) 同⑮"Lectures"p.287, ⑲『講義』三四八頁。

(45) 同⑯"Jottings" 'Patriotism and Internationalism' p.35, ⑳『余録』「愛国心と国際心」五六頁。

(46) 同⑮"Lectures"p.285, ⑲『講義』三五〇頁、⑯"Jottings"

p.35, ⑳『余録』五六頁。

(47) 同⑮"Lectures"p.283, ⑲『講義』三四八頁。

(48) 同⑮"Lectures"p.284, ⑲『講義』三四八-五〇頁。

(49) 同⑮"Lectures"p.285, ⑲『講義』三五〇頁。

(50) 同⑮"Lectures"p.285, ⑲『講義』三五〇頁。

(51) 同⑯"Jottings"'Matriotism' p.155, ⑳『余録』「憂国心」二一七頁。

(52) 同⑯"Jottings"p.155, ⑳『余録』二一七頁。

(53) 同⑫"Thoughts"p.395, ㉑『補遺』二八二頁。

(54) しかし、晩年の新渡戸が満州国建設に際して行った弁明や、昭和七年（一九三二）に日本の弁明のためにアメリカに派遣されたその行為とは日本の行動を信じていたがゆえに行ったものであったのか、いずれにしても、しばしば言行の不一致、立場の豹変と批判された点でもある。

二、東西の区別と融合

国際理解を妨げる一つの要因として新渡戸は、世界を洋の東西に区別して分け[1]、ことさら違いを浮き彫りにすることによって国の独自性を強調しようとする態度に疑問を投げ掛ける。

(一) 区別の発生

洋の東西、東洋西洋という区別は新渡戸によれば、磁石が出来る以前から、太陽崇拝の関係上、太陽の出る所沈む所によって東西の区別に重きを置いたことから始まったという[2]。東西とは元来方角を指す言葉であったのが、やがて地域を指すようになった、つまり、人工的に線を引いて、線の向こうは東こちらは西と呼ぶようになったにすぎず、東西の区別は全く人工的であるというのである[3]。それは国家というものが構成されることにより、線から向こうを敵国とする必要性が生じて行ったからである。特に古代ローマ帝国からそれがはっきり見られると

いう[4]。つまり、東洋と西洋の分割線（partition）は人為的なのに、それが一旦公布されると人類は、分割線の両側に差異（differences）があると思い込んだ[5]のである。

東西という用語は区別させることにより、人間の心に対立感情（feelings of opposition）、敵対感（hostility）、根拠のない優越感（unwarrented superiority）を引き起こすことになってしまった[6]。すなわち、東洋と西洋の境界線は地理的要因によるのでなく、思想によるという[7]考え方である。しかも、区分は元々相対的な方角を指すから正反対の言葉が同一地域を指すこともありえて、その場合、両者は実質的には無意味な呼称となってしまうことになる[8]。従って、東西の区別は心のもち方一つ[9]であるから、区別を意識しなければ気にならないものであるはずである。

それが気になるのは、国家的野望（national ambition）や政治的覇権争いによって人類は一つ（unity of mankind）という事実［筆者注：これが新渡戸の基本認識］が忘れられてしまい、東西の溝（gap）が広がったからだという[10]。分割は統治術にとってはいささか得るところがあったが、芸術と文学の進歩[11]にとっては妨げになるものである。

(二) 東西の差異

世界を分けて考える習慣が長期にわたったため、その結果、思想と心性（thought and mentality）に影響を及ぼした例はいくつも挙げられることになった[12]。風俗、習慣、民族の性格等に差はある[13]。中でも気候の影響には大きなものがある。特に東西の地域が固定されると、地域によって気候が異なるから、気候の差は心理的生理的解剖学的に差異を発生させた[14]。そこで、人為的差が具体的な差を生むことになった。現象としての違いは確かに洋

の東西間で色々指摘できるのは、そのためでもある。

(三) 東西交流の必要性と効果

人類は歴史的にみて国家の統治の必要から区別政策を取ってきたが、その国家的な魂（national soul）は人間の全き魂（whole soul of man）ではない[15]とする。部分的断片的な文化を相互理解（mutual understanding）してこそ人間全体が理解できる[16]と、人間の全面的発達と相互理解の必要性を結び付けている。従って、外からの影響なしには自発自展できない[17]とし、相互作用によって刺激し合い、より高度の素晴しい文化が生まれるとみる。例えば、近代日本は西洋と出会うことによって失ったものは少なく、かえって得るものが多かった[18]と、積極的に評価するのである。一文化、一国民の純粋性、独自性を守ることは東西交流が盛んになれば事実上不可能であり、また仮に可能だとしてもかえって独善性の弊害や、刺激を受けての新たな発展は望めないと、新渡戸は考えている。

(四) 東西の区別をなくす方策

それでは、人工的に行われた東西の区別はいかに取り除かれるのか。まず挙げられているのが融和である[19]。島国で独自の文化を誇る日本でさえも既に歴史的に中国やインドの影響を受けて、日本民族の純粋な特徴はなくなっていると指摘する。また、西洋の人間と交際するには、心を打ち明けて人間として交われば、蟠（わだかま）りがなく、差異は感じない。例えば、卓越した異国人同士が合うと、言葉は通じなくとも人間としての普遍的性質を発露するので旧知のごとくになると[20]、個人の人間性を向上させることが必要であるとする。そしてさらに、国際心の涵養

(cultivation of our international mind) が不可欠[21]としている。

〈注〉

(1) 今日の資本主義諸国と社会主義諸国を区別する「東西」という観念ではない。
(2) 全集⑥『西洋』五〇二頁。
(3) 同⑥『西洋』五三七頁。
(4) 同⑥『西洋』五〇三頁。
(5) 同⑭"Japanese"p.617, ⑱『日本人』六〇七頁。
(6) 同⑭"Japanese"p.618, ⑱『日本人』六〇七頁。
(7) 同⑥『西洋』五〇四頁。
(8) 同⑭"Japanese"p.617, ⑱『日本人』六〇六頁。
(9) 同⑥『西洋』五三七頁。
(10) 同⑭"Japanese"p.608, ⑱『日本人』五九六頁。
(11) 同㉓"Articles to 'Proceedings of the Institute of World Affairs' 1933" 'Blending of the East and West in Japan' p.397, ㉒佐藤全弘訳『「世界問題調査会第十回会議記録」寄稿文』「日本における東西の混融」二二一頁、以下"Proceedings"，『会議記録』と略す。
(12) 同㉓"Proceedings" p.398, ㉒『会議記録』二二一-二頁。
(13) 同⑥『西洋』六二八頁。
(14) 同⑥『西洋』六三六頁。
(15) 同㉓"Proceedings" p.399, ㉒『会議記録』二二三頁。
(16) 同㉓"Proceedings" p.398, ㉒『会議記録』二二三頁。
(17) 同㉓"Proceedings" p.399, ㉒『会議記録』二二三頁。
(18) 同⑮"Lectures" p.68, ⑲『講義』八六頁。
(19) 同⑥『西洋』五三七-八頁。
(20) 同①『東西』一六一頁。
(21) 同㉓"Proceedings" p.393, ㉒『会議記録』二一七頁。

三、国際心[1] (international mind)

(一) 国際心の三つの要素

新渡戸の説く国際心とは何か。特別に国際心という心があるのではなく、ただ「心のもち方」「心の態度[2]」を指すにすぎないという。それは第一に、細かい点にこだわらない心の広い態度、「襟度(きんど)即ち自己の説と希望とに全然反しなくとも、多少融合しない点ある説をも取り容れる心の態度[3]」である。この、相手との調和融合を図る態度にこそ、世界の平和や人類の真の幸福があるという[4]。

第二に、「国際的問題をフェヤプレーの見地から見る[5]」という精神である。フェヤプレーの精神とは、「ちょっと離れた、ディタッチしたところから、国際問題を眺めて、[引用者注：相手が]正しいことならば[同：相手に]譲ってもよし、自国が正しいならばあくまでもこれを通すこと[6]」で、しかも「フェヤプレーには正義の観念が土台をなしている[7]」とする。

第三に、自国中心ではなく、客観性、つまり相手や第三者の視点に立つことである。「一国の利己心 (national egoism) から離れて、あらゆる国際問題を公平に (fairly and impartially) 客観的に (objectively) 科学的に (scientifically) 観んとする精神[8]」、自国の利益ばかりでなく、他国のいうことも聞いて高い所から客観的に見る[9]心の持ち方である。新渡戸の主張する国際心は以上の要素をもつといえる。

(二) 国際心と愛国心との関係

こうした国際心は愛国心 (patriotism) とどのように関係しているのか。新渡戸は愛国心と国際心を対立関係に

あるとはみずに[10]、真の国際心は愛国心を含み、また逆に、真の愛国心は国際心を含む[11]と、愛国心は国際主義を否定するどころかむしろ強力に支持しているというのが[12]、新渡戸の基本的な考え方である。例えば、真の愛国者は、同胞の名を汚すおそれがある行動に苦言を呈し[13]、真の愛国者でありかつ国際心のもち主は、「自国と自国民の偉大とその使命とを信じ、かつ自分の国は人類の平和と福祉に貢献しうると信じる人[14]」である。また、自国を本当に愛するなら、自国の生存に不可欠の他国を愛さずにはいられない[15]という。

両者の関係について、彼は次のように表現している。

「ナショナル (国民的・愛国的) であってはじめて、インターナショナル (国際的) になりうる[16]」、「良き国際家 (internationalist) は良きナショナリストでなければならぬ。その逆もまたしかりである」「自分の国に奉仕してこそ、国際主義 (internationalism) の大義に最もよく奉仕できる」「ナショナリストも、国際心を備えてこそ、最もよく自分の国の利益を進め、名誉を増すことができる[17]」、愛国心なき国際心はあり得ない[18]、自国他国の存在を無視しては国際の観念は起こらない[19]、国際心は祖国や国籍 (fatherland or nationality)を見おとすことはない[20]、等。ただ、これらの表現では、一方が他方を含むというだけで、それがどのような関係になっているのかがはっきりしない。

関係に多少言及しているのは、次に見られる。国際心は愛国心を拡大したもの (extension of patriotism)[21]、国際心は愛国心の延長に他ならない[22]とする、あるいは、国際心は国家精神 (national mind) の対義語 (antonym) ではなく[23]、その延長というべきもの[24]という[25]。このように、新渡戸の言う愛国心と国際心は表裏一体の関係にない。国際心は愛国心が発展して公平に、客観的に広がって、自国を思いつつ第三国との調和を図り共存繁栄していこうという態度、とまとめることができる。

【国際心の対義語、対立概念】

国際心の対義語・対立概念は第二段階の愛国心や外国崇拝(exophilism)ではなく[26]、熱狂的愛国心(chauvinism)と外国恐怖心(xenophobia)であるという。また、世界市民主義[27](cosmopolitanism)を国際心の正反対の語(antithesis)であるとしている[28]。

(三) 国際心と世界市民主義(cosmopolitanism)との違い

新渡戸は世界市民精神(cosmopolitan mind)については、否定的である。国際心は世界市民主義(cosmopolitanism)や普遍主義(universalism)とは違うとする。なぜなら、それらは国や国民(states or nations)を認知しない[29]、あるいは、世界市民主義(cosmopolitanism)には国民性(nationality)[30]や国家的基礎(national basis)の観念が欠けているので、国際心ではないというのである[31]。「自己の存在を母国に結びつけている一切の関係を、そう簡単に断ち切れるものかどうか疑わし」く[32]、世界市民主義は空想的(fantastic)なものに過ぎないというのが、新渡戸の世界市民主義に対する考え方である。

両者の違いをこうも表現する。誤った世界市民主義は中心点なしに円線を描こうとし、円線そのものさえ正しい形をなさないが、真の国際主義は自国を中心として外に向かって円周を描く[33]、と。国際主義があくまでナショナル・アイデンティティを出発点にして世界に広がろうとするのに対し、世界市民主義は中心、自己のよって立つ基盤を欠くために、世界像が適切に描けないということであろう。つまり、国際主義は国の存在を否定せず、国の違いから出発して相互の独自性を尊重しつつ調和をはかっていくことによって国際理解を進めていこうというものである。

〈注〉

(1) international mind は『全集』では「国際心」「国際精神」などと訳されているが、ここでは「国際心」とした。
(2) 全集⑥『西洋』五二一頁。
(3) 同①『東西』一六六頁。
(4) 同①『東西』一六六頁。
(5) 同⑥『内観外望』三一二頁。以下『内観』と略す。
(6) 同⑥『内観』三一三頁。
(7) 同⑥『内観』三一三頁。
(8) 同⑮"Lectures"Appendix E'Opening Address at the Kyoto Conference of the Institute of Pacific Relations' pp.357-8, ⑲『講義』付録E「太平洋問題調査会・京都における開会演説」四四二頁、以下"Lectures"Appendix E,『講義』付録Eと略す。
(9) 同⑥『西洋』五二一頁。
(10) 同⑮"Lectures"p.285, ⑲『講義』三五〇頁、⑯"Jottings" p.35, ⑳『余録』五六頁。
(11) 同⑮"Lectures"Appendix E,p.358, ⑲『講義』付録E、四四二頁。
(12) 同⑮"Lectures"p.285, ⑲『講義』三五〇頁。
(13) 同㉓"Supplements of 'Editorial Jottings' " 'Abuse of Hospitality'p.647. ⑳『余録』「歓待の濫用」五八頁。以下"Supplements"と略す。
(14) 同⑯"Jottings"p.35, ⑳『余録』五六頁。
(15) 同⑯"Jottings"p.35, ⑳『余録』五六頁。
(16) 同⑮"Lectures"Appendix B'Development of International Cooperation' p.320,『講義』付録B「国際協力の発展」三九三頁、以下⑮"Lectures"Appendix B,『講義』付録Bと略す。
(17) 同⑯"Jottings"'International Nationalist' p.471, ⑳『余録』「国際心あるナショナリスト」六二九頁。
(18) 同⑤『偉人群像』四〇九頁、以下『群像』と略す。
(19) 同⑤『群像』四二一頁。
(20) 同⑮"Lectures"Appendix B,p.320, ⑲『講義』付録B、三九三頁。
(21) 同⑯"Jottings" 'Patriotism and Internationalism' p.35, ⑳『余録』「愛国心と国際心」五六頁。
(22) 同⑤『群像』四〇九頁。
(23) 同⑮"Lectures"Appendix E, p.358, ⑲『講義』付録E、

四四二頁。

(24) 同⑮"Lectures"Appendix E, p.358, ⑲『講義』付録E、四四二頁。

(25) ここで新渡戸の言う愛国心とは第二段階の愛国心のことであり、またそれは国家精神とほぼ同義に使われていると考えられる。

(26) 全集⑮"Lectures"Appendix E, p.358, ⑲『講義』付録E、四四二頁。

(27) cosmopolitanismは『全集』では「世界主義」「宇宙主義」「世界市民主義」などと訳されているが、ここでは「世界市民主義」とした。

(28) 全集⑮"Lectures"p.285, ⑲『講義』三五一頁。

(29) 同⑮"Lectures"Appendix B, p.320, ⑲『講義』付録B、三九二-三頁。

(30) 同㉓"Supplements" "Cosmopolitan Patriot" p.660, ㉔『余録』「世界市民の愛国者」二九〇-一頁。

(31) 同⑮"Lectures"Appendix E, p.358, ⑲『講義』付録E、四四二頁。

(32) 同㉓"Supplements"p.660, ㉔『余録』二九一頁。

(33) 同⑤『群像』四〇九頁。

四、国際心を高め、国際理解を深める方策

(一) 礼儀、言葉、話題

国際心を高め、国際理解を深める方策について新渡戸はまず、社交上の基本である礼儀作法を取り上げる。礼儀は根本に於いては東西の区別がないという考えのもとに、自国の礼儀を正しく行えば、[筆者注：西洋に]十分通じるとする。[1]

言葉の問題については、言葉はたとえできなくても[同：通訳を通じての対話によって]、心にわだかまりがなく、差別心、敵愾心を起こさなければ無礼もなく、交際できるという。[2]

対話をする場合、言葉よりもむしろ「何を語るか」の中身が重要である。社交の話題は文学美術が適当な題目で、政治論、宗教論を取りあげることは禁物なのに、日本人は外国人に比べて話題が少なくて、[3]これ以外に話すことがない[4]ことを新渡戸は戒める。専門以外に人間趣味（高尚な一般的修養＝文芸）を話題にする[5]ことが国際交流には必要だという。話題の豊富さ、人間の幅の広さが求められるのである。

(二) 教育

次に新渡戸は、教育について言及する。単に国家主義（nationalism）を捨てて国際主義（internationalism）に進めるようにと説得しても不可能だとして、教育の果たす役割に期待する。学校[筆者注：教育]（school house）によってなら国家主義から国際主義へ導くことは可能である[6]とする。そこで、極端な国家主義的教育から国際精神を育てる教育[7]へ転換することが、まず国際理解の基本となる。その前提として、真の教育は自己の欠点を認め、他の長所を悟り、それをまね、敵対しない[8]ということから出発しなければならないとする。

(三) 外国研究

さらに、外国の研究も重要な方策の一つとして取り上げている。外国を研究するということは、単に外国を知るだけでなく、自国を外から客観的に見るということにつながる。愛国心は外国語の研究学習を必要とするともいうが、[9]それは外国を知ることにより自国の長短を知り、さらに自国の長所を拡張し、短所は外国の長所を採って補う[10]ことにより、また世界を知って自国の特徴を一層理解するからである。

これは、東京英語学校で基本的学問はすべて英語で学んだため、日本について客観的に見る、合理的な態度を

もつことができるようになった[11]という新渡戸自身の経験から言われていることである。

【共感と思いやり】

外国研究の場合、信頼と善意という基本姿勢が前提であるとする。そして、異国民の心裡に入り込んで、内側から共感をもたなければ[想像的共感(imaginative sympathy)＝他人の個人的な見解と考え方を聡明な態度で理解すること][12]正しい理解はできない。むしろ、同情(compassion)や憐み(piety)は目を曇らせかねないとして否定的である。

その際、二つの注意事項として、相手の気質(temperament)を理解することと、相手の立場(angle)に立って考察することをあげる[13]。一言で言えば、思いやりのある心(kindly heart)が必要なのである[14]。

(四) 国民性の共通性と相違点

国民の特徴の違いは確かに否定できないが、基本的には人類は精神において一つ(one in spirit)だから[15]、地理的要因による差異はあっても、違いをことさら意識することなく、むしろ差よりも共通性に注目してそれを探求する努力をというのが、国際理解を深めるについての新渡戸の基本姿勢である。差をいくら強調しても相互理解にはつながらないからである。民族人種の差は少なく、むしろ人類として生きるものには共通なものがある[16]。例えば、身体、生理、心理、芸術、哲学、宗教、文学、思想には、差別を超越した共通な要素があることを知らなければならないとする[17]。

しかし、差を全く無視するわけではなく、人類の同一性(identity of the human race)という基本事実はあくまで固執すると同時に、国民的気質の相違点(dissimilarities)をも十分考慮する[18]。しかし、どの程度考慮するのか、その割合と具体的な方法は明示されているとは言えない。相違点の実体をよく研究して正確に理解し、知る義務がある(due)[19]と言うだけである。

新渡戸は、各国の距離が縮まれば何事も(例えば衣服や風俗習慣)共通にならざるを得ない[20]という見通しをもっていた。中でも特に共通理解の一方法として、芸術(潜在意識の底にひそむ本能的な審美感の表現)をあげる。それは全人類共通(common)に喜びを与えるものだからである[21]。しかも、自国だけの標準に従っていると世界に遅れを取るから、世界の標準に従う必要があるという[22]。それをさらに他の分野にも広げて、「人類という広い考え(broad views of humanity)、正邪についての世界的標準(world standard)の確認[23]」がなければ、国際理解は進まない。

【国際理解の鍵：普遍性】

新渡戸は共通性と似た言葉として「普遍性」という表現も使い、その追求が国際理解の鍵の一つであるとする。「普遍性(universality)は人間の本性(instinct of human mind)[24]」と言い、これは若い頃からの信念であった。「人間の本性はどこでもおよそ同じ[25]」であり、人間は普遍性を求めるものであるという基本認識である。人間の美徳悪徳は普遍的で(universal)、したがって全人類共通であるから、人類は兄弟である(brotherhood of man)と確信するようになろうと述べる[26]。

それにもかかわらず普遍性がないがしろにされて差異を強調されるのは、人種的自負偏見(racial pride and prejudice)がこの真理を覆い隠してきたからであるとする[27]。しかし、美術の例で分かるとおり、各国の美学の技術的基準を越えて、美の国際的[筆者注：普遍的]規範(universal standard)が存在すると主張する[28]。例えば、日本の基準では評価されなかった日本の美術品が、外国人に買い占められて初めて日本人は、その価値を認識し

たと、実例を挙げて主張している。

(五) 国際理解を阻む要因

これは東西の区別にも通じることであるが、国、民族、文化の違いや優越性を強調し、さらに人為的政策的に憎悪、敵愾心を煽ることにより、人種憎悪偏見が生まれる。それは政治の担当者にとっては自らの不人気を癒す興奮剤、解毒剤、下剤、安全弁として有効であり、国民に優越感（a sense of superiority）を与える。[29] 東西の二つに分裂した考え方と世界観が相互理解、統合、調和されるまでは、人間間の相互不信、よそよそしさ、ごう慢、憎悪（hatred）は続くと見て、[30] まず考え方に違いがあってはならないとする。そして、ある世代の怒り、悪意、憎悪を後代に手渡すのは近視眼的政策であり、[31] 憎悪によって、あるいは憎悪から得るものは一つもない、[32] と、憎しみをいつまでもいだきつづけることを強く否定する。[33]

憎悪心を煽り立てることは結局国際的善意（international good will）を損ない、国際理解を妨げ、ひいては世界平和（world peace）を破壊し、人類の幸福（happiness of mankind）に有害となるのである。[34]

「人間の心は……憎悪と釣り合う愛の感情が染みついており、同胞とたえず接触して成長するにつれ、憎悪の力は衰える傾きがある。国際交流（international communication）は着実に人種憎悪を弱める」「人種偏見（racial animosity）は、やがて消え去る現象なのである。ときおりは人為的にあおり立てられて燃え上がることはあっても、いつまでも燃え続ける炎とはなりえない」[35] と、たとえ憎悪、敵愾心が強く残っていても、交流を根気よくつづけることが憎悪、敵愾心を弱め、その結果としてわだかまりや差を乗り越えることができると述べている。この点、今日の日本がアジア諸国との関係をいかに改善するかについて、示唆を与えている。

(六) 国際理解への条件：人格の確立と誠の心

国際理解への道は人類という広い考え、正邪についての世界標準の確認の他に、新渡戸は「一視同仁的の度量が必要」、[36] 国際交流の要は誠、[37]「人間の活動のどの領域でも、協調（cooperation）は相互信頼と善意（mutual trust and good will）を前提する」[38] と述べ、個人の心の姿勢を問題にする。「個人人格の責任（personal responsibility）の深化」が日本の忠君愛国思想の倫理・宗教体系には欠落し、[39] 日本人は外国人に対して人格的に劣っていることを認めて萎縮する傾向があるというのが、[40] 彼の日本人観である。人間としての人格を確立し、人類の一員としての自覚を身につけることにより、偏見なく融合でき、互いの長所を学び合うことができるとする。[41] 結局、一人一人の人格の確立が基本ということであろう。

(七) その他

このほか、人種混合（mixture of race）も国際理解を深める一つの方法とする。そのそのプラス面として、国際主義に駆り立てることや、[42] 外国に関心をもち、世界的見地から思考することを可能にさせる点を挙げている。[43]

また、国際社会では現実には数々の争いがあって、そう簡単には相互理解は進まないことも事実ではあるが、政治的な争いが広がる中でも、宗教、精神、思想、芸術、科学等の高次の世界では、地域間の相互理解の必要性は理解されると、[44] この分野での相互理解を進めていくことで、政治の世界にも相互理解の必要性は認識されると期待していた。

〈注〉

(1) 全集①『東西』三六七頁。
(2) 同①『東西』三六八頁。
(3) 同①『東西』三六九頁
(4) 同⑥『帰雁の蘆』三八-九頁、以下『蘆』と略す。
(5) 同①『東西』三七〇頁。
(6) 同⑭"Japanese"p.627, ⑱『日本人』六-八頁。
(7) 同⑭"Japanese"pp.631-2, ⑱『日本人』六二二-三頁。
(8) 同㉓"Osaka Mainichi" 'Anti-Foreigh Teaching'p. 357, ㉒『大阪毎日』「拝外教育」一七四頁。
(9) 同⑫"Thoughts"p.390, ㉑『補遺』二七七頁、⑬"The Japanese Nation" p.101, ⑰佐藤全弘訳『日本国民』一〇二頁、以下"Nation"、『国民』と略す。
(10) 同⑥『西洋』六三八頁、⑥『蘆』二二頁。
(11) 同⑥『内観』三五四-五頁。
(12) 同⑭"Japanese"pp.448-9, ⑱『日本人』四一四-六頁。
(13) 同⑭"Japanese"p.444, ⑱『日本人』四一一頁。
(14) 同⑭"Japanese"p.448, ⑱『日本人』四一五頁。
(15) 同⑮"Lectures"pp.253-4, ⑲『講義』三一一頁。
(16) 同⑥『西洋』六二九頁。
(17) 同⑥『西洋』六三六-七頁。
(18) 同⑭"Japanese"p.445, ⑱『日本人』四一一頁。
(19) 同⑮"Lectures"pp.253-4, ⑲『講義』三一一頁。
(20) 同①『東西』四〇六頁。
(21) 同⑭"Japanese"p.621, ⑱『日本人』六一一頁。
(22) 同①『東西』四〇七頁。
(23) 同⑬"Nation"p.161, ⑰『国民』一六六頁。
(24) 同㉓"Letters to Kingo Miyabe"p.435, ㉒鳥居清治訳『宮部金吾宛書簡』二七三頁。
(25) 同⑬"Nation"p.161, ⑰『国民』一六六頁。
(26) 同⑯"Jottings" 'Racial Differences 'p.270, ⑳『余録』「人種のちがい」三五七頁。
(27) 同⑯"Jottings"p.270, ⑳『余録』三五七頁。
(28) 同⑭"Japanese"p.623, ⑱『日本人』六一三-四頁。
(29) 同㉓"Proceedings"pp.394-5, ㉒『会議記録』二一八-九頁。
(30) 同⑭"Japanese"p.612, ⑱『日本人』六〇〇頁。
(31) 同㉓"Osaka Mainichi"p.355, ㉒『大阪毎日』一七三頁。

(32) 同㉓"Osaka Mainichi"p.357, ㉒『大阪毎日』一七四頁。
(33) しかし、これは政策的に憎悪を煽られた場合にのみあてはまる気がする。第二次世界大戦時における日本やナチスがした行為によって憎悪を持つ国にとってはそう容易には受け入れがたいと思われる。新渡戸が存命中に、日本がアジアに対して行っていたことが知らされていたら、この点をどう考えたであろうか。また、新渡戸の死以降日本がアジアへの戦線を拡大していったため、ある意味で彼の主張は楽観的すぎたことは否めない。
(34) 全集㉓"Osaka Mainichi"p.355, ㉒『大阪毎日』一七二頁。
(35) 同㉓"Proceedings"p.359, ㉒『会議記録』二一九頁。
(36) 同①『東西』三七一頁。
(37) 同⑥『蘆』三七頁。
(38) 同⑯"Jottings" 'World Cooperation Inevitable' p.502, ⑳『余録』「世界協調は不可避である」六七三頁。
(39) 同⑬"Nation"p.161, ⑰『国民』一六六頁。
(40) 同①『東西』三六八頁。
(41) 同⑥『西洋』六四五頁。
(42) 同⑭"Japanese"p.627, ⑱『日本人』六一七頁。
(43) 同⑭"Japanese"p.627, ⑱『日本人』六一八頁。
(44) 同⑭"Japanese"p.608, ⑱『日本人』五九六-七頁。